

学 位 論 文 要 旨

氏 名 横嶋 敬行

題 目 児童期における自律的セルフ・エスティームに関する研究
－測定法の開発および教育の効果評価への適用－

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

1980年代のアメリカのセルフ・エスティーム運動にみられるように、セルフ・エスティームの概念は高めるべき心的特性として社会的に支持されてきた。日本においても自尊感情や自己肯定感の訳語で知られ、高めるべき心的特性として重要視されてきた。

しかし、1990年前後から、セルフ・エスティームを高めることの効用に対する否定的な主張が数多く登場した。それと同時に、健康や適応に寄与する適応的なセルフ・エスティームと、不健康や不適応につながる不適応的なセルフ・エスティームに、セルフ・エスティームの概念を弁別する研究も展開されてきた。そこでは、世界的に広く使用されているRosenbergのセルフ・エスティーム尺度も両側面を弁別的に測定できていないことが明らかにされている。そして近年になり、人の意識と非意識の構造への視座を背景に、自律的セルフ・エスティーム（適応的側面）と他律的セルフ・エスティーム（不適応的側面）の概念が提唱された。

一方で、TOP SELF (Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship) と呼ばれる学校予防教育プログラムにおいて、自律的セルフ・エスティームを育む理論を持つ「自己信頼心（自信）の育成」プログラムが開発・実践されていた。「自己信頼心（自信）の育成」プログラムは有効な教育効果が複数の研究で示されてきたが、既存の測定法では自律的セルフ・エスティームと他律的セルフ・エスティームを弁別的に測定することが困難であったことから、これに関する直接的な教育効果の検討が課題とされていた。

そこで、本研究では、潜在連合テスト（IAT）を用いた児童用の自律的セルフ・エスティームの測定法（SE-IAT-C）および他律的セルフ・エスティームの要素を比較的強く測定していると考えられるRosenbergセルフ・エスティーム尺度の児童版（RSES-C）を作成し、信頼性と妥当性の検討を行うこと、「自己信頼心（自信）の育成」の教育効果評価を通して自律的セルフ・エスティームを育成する教育方法を検討すること、学校現場等でSE-IAT-Cを用いた自律的セルフ・エスティームのアセスメントおよび教育効果評価の導入可能性を提示することを主目的として研究を行った。

研究1では学校教員主導の教育実践において、「自己信頼心（自信）の育成」プログラム

の学校現場への適用可能性と教育効果の検討を行った。その結果、教育プログラムは円滑に実施され、教育目標の達成や学校適応感を示す尺度得点の教育前後の上昇がみられ、学校現場への適用可能性が確認された。

研究2では、RSES-Cを作成し、信頼性の確認および担任教員による児童ノミネートとの基準関連から妥当性の検討を行った。そして、RSES-Cはセルフ・エスティームの適応的側面と不適応的側面を混在して測定している、あるいは不適応的側面を強く反映している可能性が示唆された。

研究3では、SE-IAT-Cの開発を行い、信頼性の確認およびRSES-Cとの弁別的妥当性、担任教員による児童ノミネートとの基準関連妥当性の検討を行った。その結果、信頼性および弁別的妥当性は確認されたが、基準関連妥当性に課題が残された。研究4では、非意識の心的特性が行動特徴に現れやすいことを考慮し、担任教員による児童の自律的セルフ・エスティームに関わる行動評定から妥当性の再検討を行った。そして、SE-IAT-C得点の高群は低群よりも不安や攻撃性の行動特徴が低く、自律性の行動特徴が高いことが確認され、基準関連妥当性の一部が示された。

研究5では、SE-IAT-CとRSES-C、向社会性ビニエツト尺度を用いて「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの教育効果の検証を行った。その結果、SE-IAT-Cと向社会性ビニエツト尺度の一部の変数は教育前後で得点が上昇した。一方、RSES-Cは無変化であった。これにより、自律的セルフ・エスティームに焦点化した育成の可能性が示された。

研究6と7では、学校現場で自律的セルフ・エスティームのアセスメントツールとしてSE-IAT-Cを活用するために、課題順序カウンターバランスの削除による簡易な実施方法の検討や（研究6）、実施および採点の手順に関する詳細な情報の公開、一連の研究で収集された多人数データを用いた標準参照データの提示、自律的セルフ・エスティームの状態を判断するための7ステップの基準が提示された（研究7）。

本論文の一連の研究では、自律的セルフ・エスティームの測定法の開発、それを育む教育プログラムの効果検証、学校現場でのアセスメントの可能性が示された。また、考察をまとめた第13章では、意識と非意識の機能を踏まえたRSES-CおよびSE-IAT-Cで測定されるセルフ・エスティームの性質や、自律的セルフ・エスティームの教育内容やアセスメントの導入が考察された。そして、課題と展望をまとめた第14章および第15章では、非意識の心的特性の変容可能性や、多角的な自律的および他律的セルフ・エスティームの測定方法の開発可能性、「自律的セルフ・エスティームの育成」プログラムの開発可能性への視座が提示された。